

目の前で自宅が炎に包まれて

山岸 美智子さん（昭和9年生まれ）

私は仕立て屋を営んでいた両親と姉、生まれたばかりの弟と、東京の麻布で暮らしていましたが、戦争が激しくなり、いつ空襲があるか分からないということで、仕事のある父と姉を東京の家に残し、母と弟とともに千葉県の一宮にある母の実家に疎開することになりました。

昭和20年3月10日の東京大空襲の時は、夜中、東京の方向の空が炎で真っ赤に染まっているのを、一宮から不安な気持ちで見っていました。この時、麻布にあった私の家は無事でしたが、いつまた空襲があるか分からないため、一度様子を見て来ようということになり、5月に私たちは東京に戻ったのです。

その晩のことでした。ラジオから警戒警報が流れ、私と母、姉、弟は、その日家に泊まっていた親戚とともに、急いで家を飛び出しました。警防団に入っていた父は、避難誘導や消火活動を行うため、留守にしていました。

ところが、いくらも行かないうちに、姉が忘れ物をしたから戻ると言うのです。「早く、早く」。気持ちが焦って仕方がない私は、家の中に入っていった姉を、足踏みをしながら待ちました。そして、ようやく姉が家から出てきて、私たちが再び走り出したその時です。焼夷弾が我が家を直撃しました。振り返ると、さっきまで私たちがいた家は炎に包まれていました。

夢中で逃げ回った私たちは、夜が明けたころ寺の境内にたどり着きました。そこには、近所に住んでいた友達のまこと君と彼のお母さん、弟の姿もありました。

父とも合流でき、安心したのもつかの間、父はまこと君を連れて、どこかへ行ってしまいました。

後から聞いた話だと、父はまこと君を、黒焦げになって男か女かも分からなくなった遺体のもとへ連れて行ったそうです。その遺体は父と一緒に警防団の活動をしていた、まこと君のお父さんでした。遺体のおなかの辺りに腹巻きの一部がわずかに焼け残っていて、その布の柄を見たまこと君は「これは私の父です」と答えたそうです。まこと君は当時中学2年生。お父さんの遺体と対面した時、どんな気持ちだったろうと思うと、今でも切ない気持ちになります。

自宅を失った私たちは翌日、今度は父と姉も一緒に一宮へ向かいました。そして、そこで終戦を迎えると、その後もしばらく東京に戻ることはなく農業をして暮らしました。

父も母も農業をするのは初めてで大変苦労しましたが、近所の人たちが親切にしてくれたのが本当にうれしかったです。

戦争によって、多くの人が人生を狂わされました。私たちも戦争がなければ、東京の家に住み続け、慣れない農作業に苦労することもなかったのに。まこと君だってお父さんを亡くさないで済んだのに。そう思うと、戦争には絶対反対です。国の無謀な戦争により苦しみを余儀なくされた国民に何ひとつ助成はなく、それでも明治・大正・昭和の人々は自力で立ち上がり今日があります。そのことを深く考えていただきたいと思います。戦争は犯罪という思いに至っております。



（原文のまま掲載しています）

山岸美智子さん（右から3番目）とその家族（昭和14年頃）